防 災 安 全 論 （下）

── 〈1年〉・〈10年〉・〈100年〉の防災 ──

矢守　克也（Yamori Katsuya）
京都大学防災研究所・京都大学大学院情報学研究科
キーワード：防災、実践共同体、タイムスケール

1．はじめに

これまで、同じ題目を共有する２つの論考 ── 「犯罪の自然災害化・自然災害の犯罪化」（矢守, 2003a）、および、「〈リスク社会〉における防災」（矢守, 2003b） ── を通して、防災を、自然を予測・制御する活動ではなく、人間と自然のつきあい方に働きかける活動として定位すべきことを指摘した。本稿では、この理解を踏まえて、かつ、周期的にわが国を襲う巨大地震（首都圏直下型地震、東海・東南海・南海地震など）や近年頻発する風水害を視野に、人間活動と自然現象のタイムスケール、および、そのリズムに焦点を当てたい。

2．「土手の花見」

防災の世界でよく知られた逸話に、「土手の花見」というものがある。われわれ日本人は、春、花見を楽しむわけだが、花見と言えば、川岸の土手に植えられた桜並木を思い浮かべる人も多いであろう。では、なぜ、川の土手なのか。「実は、これは、防災と関係あるんだ･･･」と話は続く。花見は春である。その前は冬。川の土手は霜や氷によって傷んでしまう。そこへ、春を挟んで梅雨がやってくる。土手が弱体化したところに増水が重なると、土手の決壊につながりかねない。これを防止するために仕組まれたのが、「土手の花見」だという。増水時期を前に必要な土手のメンテを、大勢の人間による踏み固めという形で、ごく自然に、かつ、楽しみながら実現しようというアイデアだ。

土手の多くがコンクリート護岸と化した現在、この話がどこまで有効なのかは不明である。また、植樹することが土手の強度に悪影響を及ぼすとする向きもある。しかし、筆者がここで注目したいのは、この工夫が、桜の開花という周期性のある自然現象に伴う人びとの活動と、別の自然現象（周期的に訪れる梅雨期の川の増水）とを巧みに同期させている点である。つまり、「土手の花見」は、防災という社会的活動を成功させる秘訣は、人びとの実践的な活動のリズムと自然現象が有するリズムとを上手にマッチングさせる点にあることを示唆しているように思える。

3．〈1年〉・〈10年〉・〈100年〉の防災

ここで、防災について、３つの時間リズム ── 〈1年〉・〈10年〉・〈100年〉 ── を設定してみたい。

〈1年〉：「土手の花見」の事例と同様、〈1年〉のリズムを刻んで襲ってくるハザードを、われわれ日本人は数多く知っている。梅雨、台風、豪雪などである。そして、こうしたハザードには、社会の側も、同じく〈1年〉のリズムを刻んで対応するのがおそらく有効である。実際、古来から、日本人はそのように対応してきたし、最近も、そうした生活習慣（年中行事）の復権を求める声が強い。

たとえば、室崎（2004）は、「阪神・淡路大震災では、古い家が倒れたのではない。古くて、しかもメンテナンスをしていなかった家が倒れた」と警告する。その上で、次のような事例をあげる。昔は、年に２回は大掃除をした（畳をあげれば床下の柱の腐食等に気づく）。さらに、── ここから先は次項以降とも関連し、またレイヴ（1993）の言う「実践共同体」の再生産という観点からも注目されるのだが ── ５年に一度は訪れる豊作（自然のリズム）がもたらす臨時収入によって弱くなった部分に手を入れ、20～30年に一度、子どもの独立や嫁入り等にともなって大改修（リフォーム）を行なった。こうした慣習が、家屋の保守管理を実現してきたのだ。最近では、学校や地域の運動会時に備蓄食料等を更新する、年度替わりに家族の非常連絡先を確認するなど、新しい年中行事の提案もなされている。いずれにせよ、重要なことは、〈1年〉の災害に対しては、われわれは、工夫次第で、自分や家族の生活実践のリズムを合わせることが可能だということである。

〈10年〉：〈10年〉の災害には、阪神・淡路大震災（1995年）、中越地震（2004年）といった内陸型の大地震や、「十年に一度」の巨大台風などがあてはまる。ここでまず、10年先のこと（もっと先かもしれない）に対して、われわれが常にalertであることは不可能だ、ということを率直に認めるところから始めてはどうだろう。旧来の防災実践は、〈10年〉に対しても、〈1年〉の理屈を延長適用しようとして失敗してきたように思う。

では、どうするのか。〈10年〉の災害は、あるローカリティだけに注目すればそうであるが、日本全国、世界へと目を向ければ〈1年〉のスケールへと転じる可能性があることが重要である。たとえば、内陸型の大地震は、日本全国、近隣諸国に目を向ければ、ほぼ毎年のように起こっている。昨今の異常気象も手伝って、「十年に一度」の風水害も同様の状況である。この点に、複数の災害ボランティア団体による救援ネットワーク（渥美, 2005）や、自治体間の広域支援体制（舩木・矢守ほか, 未発表）の意義を見いだすことができる。これらのインターローカルな仕組みは、「救援し／救援され」の関係を毎年のように反復することで、各ローカリティが孤立した状態にあっては10年に一度の体験でしかないことを、半ば年中行事化する。〈10年〉ものの災害に

〈1年〉ものの人間活動を付き合わせる工夫なのだ。

〈100 年〉：現在、わが国が直面するもっとも大きな自然の脅威は、東海・東南海・南海地震、および、それに伴う津波である。これらの地震・津波は、過去 90～150 年周期（まさに〈100 年〉の災害である）で太平洋岸を襲ってきた。〈100 年〉は、巨大地震を引き起こす地殻運動の時間スケールから見ればほんの一瞬に過ぎないが、人間の側では世代が３～４つにわたる長大な時間である。したがって、ここでは、どうしても、人びとから人びとへの「継承」、「伝達」といったことを問題にせざるを得ない。しかし、〈10 年〉のスケールすらもて余し気味の人間社会がいかにして〈100 年〉の計を立てることができるのか。

ここで注目したいのが、安政南海地震（1854 年）に襲われた紀伊国広村（現在の和歌山県広川町）において、当地の有力者濱口梧陵（儀兵衛）が企てた実践である。梧陵は、ヤマサ醤油の７代目当主で、明治維新後は、和歌山県知事などを務めた政治家にして実業家である。また、津波教育の素材として、現在再び脚光を浴びている物語「稲むらの火」の主人公のモデルとなった人物でもある。1820 年（文政３年）、広村に生れた梧陵は、35 歳のとき、南海地震・津波に遭遇する。このとき、彼は、巧みな方法で迅速な津波避難を実現したとされているわけだが、ここで注意を向けたいのは、むしろ災害後の彼の活躍である*）。

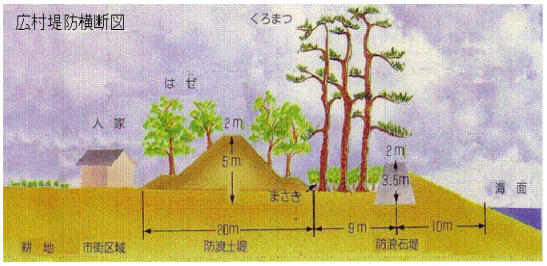

図１　広村堤防の断面図

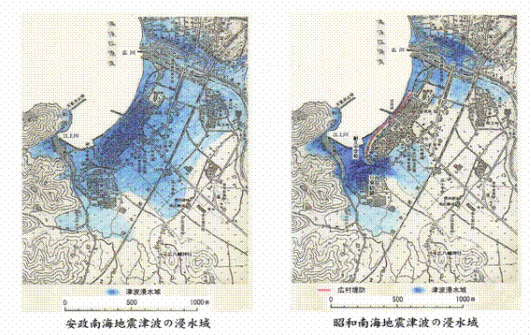

図２　広村堤防による減災効果（左：安政、右：昭和）

実は、梧陵は、大変巧みな方法で、日、週、月単位で急がれる復旧・復興活動と、〈100 年〉の計とを両立させている。彼は、激甚な災害は、人びとの命を奪うと同時に、生活の糧（田畑や舟、漁具など）を破壊し、生き残った者を苦しめる（土地を離れてしまう）ことをよく理解していた（このことは、現代社会にもそのまま通用する）。そこで、彼は、人口流出対策として、家屋 50 軒を建設し困窮者に提供するとともに、農具漁具を分配、商人には再建のための資本を融通した。同時に、緊急雇用対策として、４年間にわたり、１日約 500 人の労働者を老若男女を問わず労賃日払いで雇用したのである。この膨大な労働力が振り向けられたのが、「広村堤防築造事業」（図１）だった。津波災害の周期性を知っていた梧陵は、堤防の必要性を痛感していたと言われる。事実は小説より奇なりである。広村（広川町）は、92 年後の 1946 年、再び津波に襲われる。昭和南海地震・津波である（現在は、「その次」が懸念されているわけである）。図２に示すように、〈100 年〉を経て広村堤防（現存）は大いに役割を果たし減災に貢献したのだった。

梧陵の試みはこれだけにはとどまらない。将来津波の危険が予想される地域内にある田畑にかかる税（年貢米）を重くしてそこからの移転を勧め、従う者には税の減免措置を施している。これは、税制（社会制度）によって、人びとのふるまいを時間をかけ少しずつ、しかし確実に変容させ、人間の活動を自然が有する〈100 年〉のスケールに適合させる試みだと言える。あわせて、蘭学医と交流を持ち西洋に興味のあった梧陵は、郷里に、「稽古場」（現在の県立耐久高校）を開設。青少年の人材の育成にも務めている。知恵と技能をバトンすべき人材の育成にも取り組んでいたわけである。

そして、最後にもうひとつ。これは、おそらく梧陵の意図するところではなかったとは思うが、〈100 年〉の災害に、近視眼的な人間が抗するもう一つの力は、おそらく、世代を縦断するだけの力をもった「伝説」である。すでに人口に膾炙した「稲むらの火」という伝説に加え、ここで筆者が紹介したもう一つの物語が、〈100 年〉の災害に備える「伝説」の一つに加わってくれることを願いたい――。

*）濱口梧陵が展開した事業の重要性について最初に注意を促してくれたのは、柄谷友香さん（京都大学大学院工学研究科）である。心より感謝申し上げたい。図１、２は、柄谷さんより提供をうけた。

【引用文献】

渥美公秀　2005　災害ボランティアの 10 年―災害 NPO を含む災害救援システムの現状と展望―　日本グループ・ダイナミックス学会第 52 回大会発表論文集

舩木伸江・矢守克也　未発表　新潟県中越地震における自治体間広域応援の現状と課題

レイヴ, J.　1993　状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加―　佐伯（訳）　産業図書

室崎益輝　2004　予防防災と CODE の役割　海外災害援助市民センター（CODE）講演会シリーズ「人道援助と国際協力」

矢守克也　2003a　防災安全論（上）―犯罪の自然災害化／自然災害の犯罪化―　日本社会心理学会第 44 回大会発表論文集

矢守克也　2003b　防災安全論（中）―〈リスク社会〉における防災―　日本自然災害学会第 22 回大会発表論文集